

シヨウウオヤワ 亞相公御夜話。  
トシカゼ 年風 ↓ウメダトシカゼ 梅田年風。

トシカネ 俊兼 鳳至郡本郷に屬する部落。  
トシコシ 年越(一)除夜―藩政時代に、除夜を大年といふたのは、大年越の略であらう。玄關・式臺・茶・間・雪隠等に、燈油を盛つた土器を置いて點燈し、又圍爐裏に豆木を焚き、茶釜に湯を沸し、中に炒大豆と山椒の實とを投じ、之を汲んで家族に供した。前者を間燈といひ、後者を福茶といふた。  
(二)六日年越―正月六日をいひ、間燈・福茶の儀は大年と同じかつた。この夜門前の松飾を撤した。

(三)十四日年越―正月十四日で、その儀六日年越と同じく、歳徳棚は今日限り撤せられ、明朝の左義長に焚かれた。  
トシトクジン 歳徳神 藩政時代に正月茶の間の悪方に棚を吊して歳徳神を祭り、注連を張り、白眼鯛を懸け、燈明を供へた。若し年内立春の場合には、歳徳棚は節分の日から飾られた。

トシトクマツリ 歳徳祭 藩政時代に、正月十五日拂曉左義長の際、町方の青少年が團體を作り、歳徳と書いた大行燈を竹竿に貫いて捧げ、『歳徳歳徳』と連呼して神社の附近をねり廻り、終にそれを焼捨てるものがあつた。之を歳徳祭といひ、その際他の團體と衝突喧嘩するを快とした。  
トシノイチ 年の市 藩政時代金澤の城下では十二月廿五日から、所々本町の木戸際に年の市が開かれて、正月入用の飾物を賣うた。殊に淺野川掛造(橋場町)では、道路の兩側に

露店が設けられて、それを鬻いだ。  
トシノウチ としのうち 金澤の俳人車大著。初に編者の亡師後川の發句六十五章を掲げ、次にその辭世『年の内の春にも逢へぬ命かな』を發句とした附合があり、享和二年後川三周忌の爲にしたものである。別に俳諧續二百員が添へられてゐるが、これは後川が芭蕉百年忌に當つて、『旅に病んで夢は枯野をかじめぐる』を發句として興行した附合である。序は後川の男希也。京勝田喜右衛門等板。

トシマダンゴ 年壇園子 羽咋郡地方で、自己と同年齢のもの、死んだ時、園子を作つて分配し、生命の長からんことを祈つたをいふ。  
トシヨリシユウ 年寄衆 加賀藩に於いて執政の臣を年寄衆といふことは、何れの頃に初るか明確でないが、慶長十二年六月四日奥村伊豫守永福・篠原出羽守一孝・横山大膳長知から御郡方役人に申渡した法度書に年寄の名目のあるのが文獻に見える初であらう。利常の時元和三年五月十三日徳川秀忠が臨邸の際拜謁した本多安房守政重・横山山城守長知・奥村河内守榮明・松平伯耆康定・横山大膳康立・横山式部長治・神谷信濃守守孝・富田下野守宗高・今枝民部直恒の九人、同六年再び臨邸の際拜謁した本多安房守政重・横山山城守長知・前田對馬直正・長九郎左衛門連頼・奥村河内榮政・横山大膳康立・小幡宮内長次・奥村因幡易英・富田下總直吉・神谷丹波守孝・津田勘兵衛重次・今枝民部直恒・生駒内膳直義・脇田帶刀重俊の十四人の如きも皆事實上年寄と認められたものであらう。寛文元年の頃本多安房政長・前田三左衛門直之・長九郎左衛門連頼・横

山左衛門忠次・前田對馬孝貞・奥村河内榮政・奥村因幡康禮・小幡宮内長次・今枝民部近義九人を寄合とし、その集會する所を寄合所といふた。その後延寶中に至つては、年寄中の名顯然として見えたるも寄合の名尙存し、貞享三年十一月十三日大年寄人持組頭に本多安房政長・前田佐渡孝貞・奥村壹岐康禮・奥村伊豫時成、人持組頭に前田備後直佐・長九郎左衛門向連・横山左衛門英盛を命ぜられるに及んで既に寄合の名なく、元祿三年九月二十九日村井出雲親長の前田直佐に代つて人持組頭となるに至つて、後世の年寄衆八家の制となつた。年寄衆は年寄中とも書き、そのうち諸大夫に叙爵せられたものは、年頭御禮の際など普通の年寄中と引離して別格とした。

トシヨリジユウセキシユヒツ 年寄中席執筆 御年寄中席執筆の始は詳かでないが、佐佐木志津摩など之を勤めたといふから、能書の者に命ぜられたものであらう。寛文年中に至つて御算用者より之を命ぜられ、その後元祿年中齋藤善助が御算用者小頭並に任じ、且つ當職をも兼ね勤めた。享保年中に至つては、沖彌三太夫・溝江太左衛門が勤めたが、是は士分から任ぜられた初であり、以後連綿した。執筆とは年寄中席に限る留書の職名である。  
トシヨリセキミナラヒ 年寄席見習 加賀藩年寄中八家の嫡子にして、年齢の長じたるものは、別に祿概ね三千石を給せられて、年寄の末班に列し、政務に參與した。年寄中席見習といふ者である。  
トシヨリナミ 年寄並 ↓トヲムラ 十村。  
トシヲ 年緒 ↓スガヤトシヲ 菅屋年緒。  
トシヲトコ 年男 藩政時代に追儼の式に

撒豆を擧る者であるが、城内では會所奉行がその任に當つた。當年の年男たるべきものは、亦前年の煤拂の儀を擧り、十二月廿八日歳暮祝儀の日に、具足の鏡餅を藩侯居室の床の間に飾る任にも當つた。  
トダ 富田 ↓トミタ 富田。

トダカスマ 戸田敷馬 石川郡美川の人加登屋六郎平の子、幼名六三郎。大野の中村屋辨吉・金澤の清右衛門等に就いて彫刻を學び之を能くした。明治六年能美郡津波倉戸田爲定の養子となり、數馬と稱して神職を勤め、十六年六月二十日歿した。享年四十二。  
トダカツタケ 戸田勝武 通稱清太夫。父は與一郎。貞享二年遺知六百石を襲ぎ、御普請奉行・閉番・御先簡頭・前田吉徳御守殿御用に歴任し、享保九年八月七日七十五歳で歿。  
トダカツトモ 戸田勝具 通稱傳太郎・與一郎。天明三年五月新知三百石を受け、組外より御馬廻組に轉じ、弓矢奉行・前田齊敬御抱守、同御附大小將組・弓矢奉行(再勤)・前田齊廣御抱守・同御附大小將横目より昇進して定番頭並に至り、文化七年三月二百石を加へ、文政元年八月又百石を増し、二年歿した。

トダカツヨシ 戸田勝芳 通稱五左衛門・與一郎・清太夫。與一郎守勝の子。初め新知二百石を受け、大小將より表小將となり、御使番・御近習御用を經、安永五年三月家督千石を襲ぎ人持組に列したが、天明二年十月盤居を命ぜられ、十一月二日遠島の宣告を得て一類預となり、三年五月廿一日能登島に赴き、二十人扶持を受け、五年十一月五日配所御免、文化中六十四歳を以て歿した。子傳太郎(後與一郎勝具)祖父が老年に至るまで能く

トシヨリナミ 年寄並 ↓トヲムラ 十村。  
トシヲ 年緒 ↓スガヤトシヲ 菅屋年緒。  
トシヲトコ 年男 藩政時代に追儼の式に